

文化・芸術

「肖像」

1956年、油彩、カンバス
72・7センチ×50・0センチ

ベルナール・ピュッフェ（1928～99年）

現在、大川美術館で展示されている丸木位里、俊の「原爆の図」は、70年前に桐生で公開されました。黒い画面のなかで裸の人々がうごめいています。当時、ここに描かれた戦禍のなかの群像を、人々はどのように受け止めたのでしょうか。

言うまでもなく第2次世界大戦は、現実の世界と人々の価値観の崩壊をもたらしました。戦後、荒廃した世界に生きる人間を、画家はどのように描いたのでしょうか。戦後を象徴する人間像を描いた画家のひとりにフランスのベルナール・ピュッフェがいます。この画家にかかれは、飾り立てた優雅な貴婦人さえも、すべてが剥がされたありのままの姿として冷徹に描かれます。まるで、い黒い線と鋭角的なフォルム、モノクロームに近い寒々とした色彩で描かれた肖像画は、当時の人々の荒涼とした心象にひびくものがあったのです。今のコロナ禍はいつか治まるでしょうが、その後、どのような人間のイメージが生まれてくるのでしょうか。

（田中）

名画の扉

大川美術館から

